二〇二五年度　第一回　入学試験問題

国　語（50分）

〈注　意〉

（一）　開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。

（二）　問題は1ページから36ページに印刷されています。

（三）　受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。

（四）　解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

受験番号

Ⅰ

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

えび男くんという名は本名ではない。最初のころ本名で呼んでいたら、

「ほんとうはその名前好きじゃないの」と言ったのだ。それでは何と呼んでほしいのかと尋ねると、しばらく考えたすえ、

「えび」と答えた。えびが好きなのだそうである。

ならばえびくん、とわたしが始めると、それでは不満そうなのであった。

「えびくんなんて、かわいすぎるよ」

あれこれ試してみて、結局えび男くんに落ちついたのは、それから数日後だったように思う。

「えび男ね、まあそんなところかな」と、えび男くんは大人びた口調で言ったが、うなじはあいかわらず細くて頼りないのだった。

えび男くんはいつも「今日学校であったこと」や「今日考えた大事なこと」や「明日起こるかもしれないこと」について、静かなゆっくりとした口調で話してくれる。

「今日はね、四百メートルのトラックを走ったよ」そんなふうにえび男くんの話は始まる。

「学校のそばにⓐキョウギジョウがあるんだ」

そこでえび男くんは言葉を切る。えび男くんの話は、いつもとぎれとぎれだ。とぎれの途中で意見を述べたりすると、決してその後の言葉が続かないことを何回かの経験によって知ってから、わたしはえび男くんの話のとぎれ目にはできるだけ黙っているようになった。

「先生はね、好きなだけ走りなさいって言ったんだよ」

①好きなだけか。言うと、えび男くんは、

「好きなだけだよ」と続けた。
「鈴木くんや木下くんなんて、帰る時間までほとんど休まずに走り続けてた」ほっとため息をつく。
「でもぼくは二周しか走らなかったな」
そこまで喋って、えび男くんは机の上にころがっていたみかんを手に取った。丁寧に剥きはじめる。皮をⓑキントウに剥き、筋をいっぽんいっぽん取り、小房に分けたものを口に持っていき、ちゅうと吸った。
「なんかさ、へんな気持ちになっちゃったんだ」
吸ったあとの房は、花のようにきれいに広げた皮の上にのせる。
「遠ざかったり近づいたりするみんなの背中見てたらね。なんかこう」
またちゅうと吸う。
「②ぼくだけが動いてないような気持ちになっちゃったんだよね」
動いていない気持ちか、そうか。
そのあとに、それはわかるような気がする、と言いかけたが、やめた。えび男くんは、わかる、という言葉があまり好きではないみたいだったので。
「ぼくのまわりのみんなが動いてるけど、ぼくだけひとところに止まっちゃってるみたいな」
ちゅう。
「そんな感じ」
えび男くんはわたしの方をほとんど見ないで話す。机やみかんを見ながら、話す。机やみかんに向かって、あれこれ、話す。わたしが頷くと、わたしに向かってではなく、机やみかんに向かって、頷き返す。
えび男くんは、わたしの部屋の隣の隣の３０４号室に住んでいるのだ。

「三人家族」と、ある日えび男くんは説明した。
「三人家族だけどね、でも三人いることは少ないよ」そう説明したのだ。
少ないのか。言うと、
「［A］稀だね、三人そろってることは。たいていお父さんは、いない」と答えた。
「三人そろうのが稀なんでね、③お母さんはニンゲンフシンなんだな」
人間不信か。むつかしい言葉知ってるね。
「はっきり意味知らないけどさ」えび男くんは、少しⓒテれたように言った。頬がⓓコウチョウし、目が三日月のかたちに細められ、珍しくえび男くんのまわりの空気が一瞬華やいだ。しかし次の瞬間には元よりももっとしんとしたえび男くんに戻り、
「意味知らないけど、［B］わかるよ」と続けた。
［B］。
「［B］ね。あのさ、遊ぼうよ、一緒に、って気持ちになれないってことでしょ。ニンゲンフシン」
なるほどね。一緒に遊ぼうよ、にならないのね。
「そうだよ。お母さん、ぼくとだって遊ばないもん。ときどき一人でトランプとかしてるけど。一緒にやろうよって言ってばばぬきとかやってもつまんなさそうだしなあ」
えび男くんはともだちと一緒に遊ぶの、好き？　と聞こうと思ったが、やめておいた。不躾な質問に思えたからだ。
「あのさ、明日はぼくころぶかなあ」二つめのみかんを剥きながら、えび男くんは突然言った。
ころぶの？　聞き返すと、
「ころぶかもしれないじゃない」と答える。
えび男くん、ころびやすいの？

「いや、特に。でもころぶかもしれないでしょ」

そう。

「そうだよ。明日はきっところぶよ、ぼく」ⓔカクシンに満ちた様子で、えび男くんは言った。

「ころんだら、ヨードチンキつける。しみるけど、ぼく平気だよ」平気だよ、と言いながら、また目を細めた。頼りないうなじを深く曲げて、頷いた。それから、ちゅうとみかんを吸った。

えび男くんは、ほんのときおりだが、いやに饒舌になることがある。

いつもが口少なというわけでもないが、喋るさまがとぎれとぎれのせいか、お喋りだという印象がない。そのえび男くんが、饒舌になるのは、曇りの日が多い。

「実は」と始めたのも、曇りの日だった。

「実は、えびが好きなのは、ぼくじゃない」決めつけるような口調で始まった。

【　あ　】

えびが好きなのはぼくじゃなくてえびが好きなのはぼくの家族であるところのお父さんなのである、お父さんはえびの名産地に育って、えびが名産であるから、そこは海辺の土地だったのだが、海辺の土地でお父さんは毎日磯釣りをしたり海にもぐったり岩場で磯の生物を採ったり砂浜をかけまわったりして［　C　］と暮らした、えび男くんのように家の中でひそひそと絵や字を書いたり一人で本を読んだり、そんな子供とは違う型の子供だったらしい、えび男くんが好きなのはほんとはえびではなくハンバーグである、お母さんは三日に一回はハンバーグを作ってくれる、それは薄くかりりとして、噛めば中からじゅっとおいしい汁が出てくるハンバーグなのに、お父さんはハンバーグを見るとなんだ子供の食べ物じゃないかと言う、お母さんはお父さんのいるときにはえびの料理を作る、えびはそりゃあおいしいけれど、ぼくはえびが好きなのかそうでないのかときどきわからなくなる、えびはおいしいのかもし

れない、ただしお父さんが家にいることはめったにないので、えびを食べる機会は言うほどはないのだけれど。

えび男くんはそれだけのことをひといきに喋った。屋根のすぐ上を飛行機が飛んでいくような音がした。曇りなので、音が近く感じられる。

【 い 】

「寒いよね、今日は」

それほど寒くないと思ったが、えび男くんの顔が白い。牛乳を温めて出すと、

「ああ」とえび男くんは言って、コップを両手で囲った。

【 う 】

「ああ、ほかほかだ」

牛乳を飲んでいる途中で、えび男くんはふたたび玄関に行き、手提げの中から箱を取り出した。机の上に置いて、蓋をはずす。箱庭だった。

「学校でつくったの。あげる」

運ぶ途中で崩れたのか、土が少し片寄っていた。すすきの穂と椿の枝が何本か挿してあり、横にはボール紙で作った牛と豚らしい動物がいた。牛が三頭、仔豚が一匹。

牛、ぶちだね。言うと、えび男くんは一頭をとり出した。

「牛の形とるの、けっこうむずかしかったよ」

【 え 】

牛はかなり上手にできていた。首を地面にのばし、目を開けて、足を少し広げる姿勢をとっている。机の上に置くと、のんびりと草を食んでいる風情になる。そこにない草を食んでいる風情になる。

えび男くんは牛を眺めるわたしの顔を、熱心に覗きこんだ。えび男くんの瞳は、黒よりも薄く茶よりも濃い。まばたきをすると、睫毛が目の下に影をつくった。

とっても牛らしいよ、これ。言うと、えび男くんは目を三日月にしてから、そっと牛を箱に戻した。

「ねえ、ぼく思ったんだけど」牛乳の残りを飲み干しながら、えび男くんはチョコウエハースをつまんだ。何枚かをいっぺんにつまんだ。

「お父さんはさ、のびのび遊ぶ人間が好きなんだね」

そうなのかな。答えると、えび男くんは、

「そうだよ。だからお母さんやぼくのところにあんまり帰って来ないんだよ」と続けた。

「のびのび遊ばないから、つまんないんじゃないのかな」

わからないな。ほんとうにわからなくてつぶやくと、えび男くんはたいそう考え深そうな様子になって、

「④お父さんはニンゲンフシンじゃないんだね。だから、ぼくやお母さんとは遊ばないけど、ぼくやお母さんじゃない人たちとは、いっぱい遊んでるんだよ、きっと」と、唇を少しとがらせながら、言った。

もっと牛乳飲む？　聞くと、えび男くんは首を横に振った。

「もう飲まない。もういいです。ありがとう」そう答え、牛の位置を少しなおし、仔豚を撫でた。すすきの穂がしばらくの間揺れ、それから静まった。

えび男くんは、しばらく「わたし」の家に来なくなった。えび男くんのいるはずの３０４号室は静かで、「わたし」はえび男くんの好きなチョコウエハースを用意してえび男くんを待っていたが、えび男くんは来なかった。じきに正月が来てそれが終わってもえび男くんは現れず、えび男くんのくれた箱庭は次第に色あせていった。そのうちにわたしはチョコウエハースを

買わなくなったが、一方でえび男くんの声が聞きたい、えび男くんの心細いうなじを眺めたいと思っていたのだった。

一月も半ばになり、暖かな日が何日か続いた。梨畑から続く長い坂道を、わたしは散歩していた。夕方の所在ない時間に、とりとめもなく散歩していた。どこからか煙(けむり)の匂(にお)いがする。

「ねえ」という声がうしろから聞こえた。

え、と振(ふ)り向(む)くと、えび男くんだった。

「ねえ、焚(た)き火(び)の匂いだよ」

薄闇(うすやみ)の中を、坂の下からえび男くんがのぼってくる。

ひさしぶり。そんなようなことを口の中でつぶやいて、わたしは坂の途中でえび男くんと向かいあった。こうやって外で立って話をするのは、初めてかもしれない。えび男くんの背が少し伸(の)びたように感じられた。

「焚き火だよ、行ってみようよ」

えび男くんはわたしと並んだ。わたしの手を取って坂の上へと引っ張ってゆく。

しばらく来なかったのね。そう言うと、えび男くんは、

「まあね」と答えた。

「ちょっとね、お父さんとお母さんの間でとりこみごとがあったの」

大人びた口調である。もともとこどもこどもしたところは少なかったのだが、「とりこみごと」という言葉の発音はかんぜんに大人の口調だった。思わずえび男くんを見た。⑤えび男くんの顔だった。顔は、子供のものだった。

「元気だった?」闊達(かったつ)な様子でえび男くんが訊(たず)ねる。

元気だったわよ。でもえび男くんが来なくて、ちょっとつまんなかった。答えると、えび男くんは喉(のど)の奥(おく)でかすかに笑い声をたて

た。

坂をのぼりきったところにある空き地で、大きな火が焚かれていた。はぜる音がしていて、二、三十人ほどの大人や子供が焚き火を囲んでいる。木の枝に桃色や緑色の丸い餅を刺したものを火にかざしている人もいる。

「*どんど焼きだね」えび男くんが言った。

よく知ってるね、どんど焼きなんて。

「小さいころ、お父さんの田舎に連れて行ってもらったときにね」えび男くんは、わたしの手を握ったまま言った。

「会うの、ひさしぶりだよね」これも大人の口調である。

ほんとにひさしぶり。チョコウエハース、しけっちゃった。言うと、えび男くんは今度は声を出して笑った。

「また買っておいて。行くから」

もう大丈夫なの、その、とりこみごと。聞くと、えび男くんはわずかに頷いた。

そう、大丈夫なの。よかった。

「ほんとはね、大丈夫じゃないんだけど」しばらくして、えび男くんが小さな声で言った。火が大きな音ではぜている。

「ぼく」さらに小さな声である。

「ちょっとのあいだ」子供の声に戻っている。

「⑥ニンゲンフシンになってみてたんだ」

焚き火を囲む人たちの顔が橙色に輝いていた。火をみつめる人たちの表情は、どれも同じように見えた。口をわずかに開け、目を細め、嬉しいような悲しいような、どちらでもあるような表情なのだった。たぶんわたしもえび男くんも同じ表情で焚き火をみつめているのだろう。

「でももうやめたよ」えび男くんはつないだ手に少し力をこめた。

「だって、ニンゲンフシンて、かなしいばかりでいやなんだもん」
わたしも、手に力を入れた。しばらくそのまま力を入れていた。木に刺した餅が焼けると、見物人の間に枝がまわされた。餅を一個ずつ取っては、まわす。しかしわたしたちのところにまわって来る前に、餅はなくなってしまった。
「残念」えび男くんが言った。
「でもほんとはあまりおいしくないんだよ、あれ」
そうだね、味もついてないしね。
えび男くんの顔も、橙色に輝いている。紙やお飾(かざ)りが火のなかに投げこまれ、そのたびに炎(ほのお)が大きく燃え上がった。何回も木の枝はまわされ、しかし一回もわたしたちのところまではまわって来なかった。
「あのさ、熱いっていう感じをかたちにすると、どんなかたちになると思う」火をみつめながら、えび男くんがふと聞いた。
かたちねえ。かたち。やっぱり、火かなあ。
「ぼくはね、熱いっていうのは、手を天に向かって差し上げてる太ったおじいさんみたいなかたちだと思う」
ふうん。それはなんだかおもしろいね。
「別におもしろくもないけどさ。じゃね、寒いっていうかたちは?」
寒い、ね。寒いはね、星みたいなものかなあ。
「ぼくの寒いはね、小さくて青い色の空き瓶(びん)だよ」
えび男くんは言って、わたしの手を振りほどくようにしてから、焚き火に背を向けた。えび男くんのうなじはあいかわらずたよりなかった。そのうなじをもたげ、空を見る。わたしも同じようにして顔を空に向けた。シリウスが白く光っている。ほかの星は炎の明るさに打ち消されて、よく見えない。
そうやってしばらく立っていると、うしろから、

「そら」と声をかけられた。
「そら、あんたら、これあげるよ」
振り向くと、みかんを両手に持った人がいた。
「こんなはじっこにいちゃ、餅はまわってこないだろう、腹も減るしさ、そら」言いながら、みかんをえび男くんとわたしの手におしこむ。二個ずつおしこむ。
「ありがとう」えび男くんは目をみはっている。目をみはりながら、深い声で礼を言った。
「ありがとう」もう一度、えび男くんは繰り返した。
⑦なんともいえない声だった。
みかんをくれた人は、笑いながらえび男くんの頭を撫でた。
「いい子だ」そう言いながら、撫でた。
しばらく「いい子だいい子だ」と言いながらえび男くんの頭を撫でてから、その人は炎に近いほうに歩み去った。
炎が少しずつ小さくなっていく。いつの間にか人の数が減っている。さきほどみかんをくれた人は、炎を囲む人たちに紛れて、見分けがつかなくなっていた。
「みかんだねえ」えび男くんが言った。
「二個もあるよ」
わたしはえび男くんの肩をぽんと叩いた。
えび男くんもわたしの肩をぽんと叩いた。つまさき立ちになって、ぽんぽんぽんと三回、叩き返した。
坂を下りながら、わたしたちはふたたび空を見上げていた。

「あ、リゲル」えび男くんがつぶやいた。
よく知ってるね。言うと、えび男くんはてれたように、
「こないだお母さんと二人でプラネタリウムに行ったんだ」と答えた。
しばらく黙って歩いた。焚き火のはぜる音が遠ざかる。音がすっかり聞こえなくなったころ、えび男くんが、
「［　D　］」と言った。
みかんねえ。
「［　E　］」
見ると、えび男くんは、二つのみかんをズボンの両ポケットに入れているのだった。
「［　F　］」そう言って、ズボンの上からそっとみかんを撫でる。だいじにだいじに、撫でる。
みかんはね、おいしいっていう感じをかたちにしたんだと思う。
「［　G　］」
そのままのこともあるよ、そういうこともあるよ。
「そうだね、そうかもね」少ししてからえび男くんは言い、みかんを一つポケットから取り出して、皮を剥いた。半分に割り、筋も取らずにそのまま口にほうりこんだ。
三つ星がよく光ってるね。言うと、えび男くんはみかんを口に入れたままのくぐもった声で、
「あのね。星は、寒いをかたちにしたものじゃないと、ぼくは思うな」と答えた。
ふうん、とわたしが言うと、えび男くんは、
⑧「星はね、あったかいよ」とつぶやいた。
「星の光は昔の光でしょ。昔の光はあったかいよ、きっと」きっと、と言いながら、えび男くんは鼻をくすんと言わせた。

かぜ？　と聞くと、
「違うよ、少し泣いてるんだよ」えび男くんは答えた。
昔の光は、あったかいのか。わたしが言うと、
「昔の光はあったかいよ、きっと」えび男くんは繰り返した。
ハンケチ、使う？　聞くとえび男くんは、
「いい」と、ことわった。それから、自分のズボンからちり紙を出してちんと鼻をかみ、
「昔の光はあったかいけど、今はもうないものの光でしょ。いくら昔の光が届いてもその光は終わった光なんだ。だから、ぼく泣いたのさ」と、しっかりした声で言った。
わたしがえび男くんの手を握ると、えび男くんも握り返した。それからえび男くんは、小さな声で、「むかしのひかりいまいずこ」と歌いはじめた。
えび男くんにあわせてわたしも、「むかしのひかり」と唱和した。歌いながら、二人並んで坂道を下った。ゆっくりと下った。
三つ星とリゲルが、遥（はる）か彼方（かなた）でまたたいている。

【注】

＊どんど焼き……正月の松飾（まつかざ）り・しめなわ・書き初（ぞ）めなどを家々から持ち寄って、一箇所（かしょ）に積み上げて燃やす正月の火祭り行事。

【問1】 ═══ⓐ～ⓔのカタカナを漢字に改めなさい（楷書で、ていねいに書くこと）。

ⓐ キョウギジョウ　ⓑ キントウ　ⓒ テれた　ⓓ コウチョウ　ⓔ カクシン

【問2】 ═══①「好きなだけか。言うと」とありますが、この場面に関する説明として次の中から最も適当なものを選び、（ア）～（エ）の記号で答えなさい。

（ア） えび男くんの話の本筋がなかなか見えず、疑問が口をついて出てしまっている。

（イ） えび男くんの話が悲観的な方向に進みそうなので、話題を変えようとしている。

（ウ） えび男くんの話に耳を傾けていることを伝えながら、つぎの言葉を促している。

（エ） えび男くんの話を退屈に思っていることが、どこか口調に表れてしまっている。

【問3】 ――②「ぼくだけが動いてないような気持ち」とありますが、どういう気持ちですか。次の中から最も適当なものを選び、（ア）～（エ）の記号で答えなさい。

（ア） 自分だけが頼りなく見えるせいで友だちからは相手にされず、いつの間にか蚊帳（かや）の外に置かれてしまったことを寂（さび）しく思っている。

（イ） 自分も精一杯（せいいっぱい）走っていたが周りと比べると足が遅（おそ）いため、周囲の友だちからは不思議と馬鹿にされているような気がしている。

（ウ） 一緒に走っている皆（みんな）との差が開いたり縮まったりするのを見て、自分だけがその場にとどまっているかのように感じている。

（エ） 自分が両親や友人との複雑な関係の中で上手（うま）く立ち回れずに身動きできなくなったことを、どこか腹立たしく思っている。

【問4】 A ～ C に当てはまる語として適当なものを次の中からそれぞれ選び、（ア）～（オ）の記号で答えなさい。

（ア） のびのび　（イ） うすうす　（ウ） どんどん　（エ） ごくごく　（オ） しばしば

【問5】 ――③「お母さんはニンゲンフシンなんだな」、④「お父さんはニンゲンフシンじゃないんだね」とありますが、これに関する次の説明文を読んで、［a］～［d］に当てはまるものを選び、それぞれ（ア）～（ク）の記号で答えなさい。ただし、**同じ記号を2度以上用いてはいけません**。

えび男くんによると、えび男くんの母親は「ニンゲンフシン」で、父親は「ニンゲンフシン」ではありません。えび男くんがなぜこのように両親を解釈（かいしゃく）したのか、考えてみましょう。人間不信とは、人を信じられなくなることですが、小学生のえび男くんは「ニンゲンフシン」を［a］という意味だと誤解しているようです。えび男くんは、たまに一緒にトランプをしてもつまらなそうな母親に対して、このように感じているのです。えび男くんの語る様子からは、［b］が浮（う）かび上（あ）がります。

一方で、父親はえび男くんともその母親とも異なるタイプの人のようです。なかなか家に帰ってこない父親についてえび男くんは、［c］だと判断しているようですが、ここからは、［d］が浮かび上がります。えび男くんは、両親が自分にあまり関心を寄せてはいないと感じながら生活し、その様子をいま隣の隣の部屋に住んでいる「わたし」に伝えているのです。

（ア） 妻子と一緒に生活したいと考えている人
（イ） 誰（だれ）かに意地悪をしても心が痛まないこと
（ウ） 外でいろんな人と遊べる社交的な人
（エ） 一緒に遊ぶ気持ちになれないこと
（オ） 子どもと家庭に関心を向けない父親の姿
（カ） 子どもとの関わりを楽しめない母親の姿
（キ） 子どもや妻から恐（おそ）れられている父親の姿
（ク） 夫との関係悪化ばかりを気に病（や）む母親の姿

【問6】 次の文章は本文中の【 あ 】～【 え 】のいずれかに当てはまります。その場所として最も適当なものを選び、【 あ 】～【 え 】の記号で答えなさい。

えび男くんのお母さんのハンバーグ、おいしそうだね。わたしが言うと、えび男くんは真面目な表情で頷いた。
それから、玄関に放り出してあった自分のジャンパーを持ってきて、はおった。

【問7】 ――⑤「えび男くんの顔だった。顔は、子供のものだった」とありますが、この部分の説明として次の中から最も適当なものを選び、（ア）～（エ）の記号で答えなさい。

（ア）「わたし」は、えび男くんが殻（から）に閉じこもっていたことを心配したが、その表情には昔と変わらない快活さが感じられて嬉しく思っている。

（イ）「わたし」は、いつしかえび男くんの態度が攻撃的（こうげきてき）になったことに戸惑（とまど）いながらも、表情は相変わらず幼いままであることに安堵（あんど）している。

（ウ）「わたし」は、えび男くんが大人びた態度をとったことに感心しつつも、その表情が子どもじみたものであったので少し不安を感じている。

（エ）「わたし」は、ひさしぶりに接したえび男くんの子どもらしくない言動に驚（おどろ）きつつも、表情はかつてと変わっていないことを確かめている。

【問8】 ――⑥「ニンゲンフシンになってみてたんだ」とありますが、どういうことですか。次の説明文を読んで、（1）～（4）について適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

かつて、えび男くんは「わたし」の家に寄り、「わたし」にいろいろな話を聞かせてくれました。しかし、

（1）（ア）母親との関係が悪くなってしまったことで、えび男くんは次第に殻に閉じこもるようになります
（イ）家庭の中で自分が少し浮いているように感じて以来、えび男くんはだれも信じられなくなります
（ウ）年末年始に両親の間にとりこみごとが起こり、えび男くんは「わたし」の家を訪れなくなります

。

自ら「ニンゲンフシン」になってみたと言うえび男くんは、その間、

（2）（エ）だれかと一緒に遊ぼうという気持ちを、持とうとしなかったのかもしれません
（オ）母親の味方をすることで父親に反省を促し、家族を再建したかったのでしょう
（カ）自身の存在を消すことにより両親が互いに向き合うことを期待したのでしょう

。

「ニンゲンフシン」の経験を経て、えび男くんは、

（3）（キ）父親は自分と母親のことをいまでも深く愛していることに気づいたのだ
（ク）母親もまた、かなしいばかりでいやな状態にあることを理解できたのだ
（ケ）自分を傷つける大人に対して自分なりに仕返しの方法を身につけたのだ

と言えます。そのため、「ニンゲンフシン」をやめたえび男くんは、再び「わたし」と交流を持つのです。「ニンゲンフシン」になるという経験はえび男くんにとって、（4）

（コ）母親の立場を理解するための一つの方法
（サ）両親の仲を取り持つための最後の手段
（シ）父親に愛されようとする思いの表れ

だったと言えるでしょう。

【問9】 ――⑦「なんともいえない声だった」とありますが、これに関する次の説明文を読んで、（1）～（4）について適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

私とえび男くんは散歩の途中、どんど焼きの焚き火を囲む人々の輪に加わります。

（1）（ア）なかなか回ってこない餅を待つあいだに、二人が話をしていると
（イ）餅がなくなってしまったことに、えび男くんがいらだっていると
（ウ）寒さと空腹のあまり二人が餅を手に入れることを切望していた時

、ある人がみかんを二つずつ二人の「手におしこむ」ようにくれたのです。えび男くんにとっても「わたし」にとっても、この人の言動は予期しなかったものでしょう。それは、少し前まで「ニンゲンフシン」になっていたえび男くんにとって、

（2）（エ）土足のまま心の中に踏み込んでくるような、失礼なものでした
（オ）戸惑いをもたらすと同時に、心が大きく動かされるものでした
（カ）人間に対する信頼を揺るがすほど、とても衝撃的なものでした

。さらに、「みかんをくれた人」は「いい子」だとえび男くんの頭を何度もなでます。このような形で大人から関心を向けられた経験はえび男くんに、

（3）（キ）家族の問題を解決できなかった自分のふがいなさを反省させた
（ク）かつてどんど焼きに一緒に行った父親のことを思い起こさせた
（ケ）父親は自分と母親を厄介ものだと考えていたのだと気づかせた

かもしれません。

見知らぬ人の親切を受け入れ、えび男くんは「なんともいえない声」で感謝を述べますが、それは、

（4）
（コ）　いつまでも「昔の光」に囚われてしまっている状態を暗示している
（サ）　まだ「ニンゲンフシン」の状態から脱せていないことを示している
（シ）　「とりこみごと」によって傷ついた心が回復する兆しを表している

と考えることができるでしょう。

【問10】 D ～ G に当てはまるえび男くんの発言を次の中から選び、それぞれ（ア）～（エ）の記号で答えなさい。

（ア）　それじゃそのままじゃない
（イ）　みかんって、ひやひやするね
（ウ）　足までひやひやが伝わってくるよ
（エ）　みかんって、どんな感じをかたちにしたものなんだろう

【問11】 ――⑧「『星はね、あったかいよ』とつぶやいた」とありますが、どういうことですか。これに関する次の説明文を読んで、［ a ］～［ f ］に当てはまるものを選び、それぞれ（ア）～（コ）の記号で答えなさい。ただし、**同じ記号を2度以上用いてはいけません。**

「寒い」をかたちにすると星になると言った「わたし」に対して、えび男くんは「星はね、あったかいよ、きっと」と言います。えび男くんがこのように言ったのはなぜでしょうか。

えび男くんはリゲルを夜空に見つけますが、その光は約850年前のものです。このように、いま見えている星の光が過去のものであることを、えび男くんは知っています。そして、えび男くんは、家族三人で過ごした日々を「今はもうないもの」として認識（にんしき）していることと、星の光が過去のものであることを重ねるのです。

かつて、えび好きの父親が帰って来る日に母親は、えび男くんの好物のハンバーグではなく父親の好きなえび料理を作りました。それは、壊（こわ）れかけの家族が食卓（しょくたく）を囲むきっかけであり、［ a ］でもありました。さらに、えび男くんは自身の呼び名を父親が好きなえびから名付けますが、そうした理由は、［ b ］があったからだと言えるでしょう。

しかし、年末年始に両親の「とりこみごと」が起こり、家族三人が一緒に生活することは難しくなったようです。その結果、えび男くんは母親を真似（まね）て「ニンゲンフシン」になってみますが、時を経て「ニンゲンフシン」は「かなしいばかりでいや」なものだと思い至ります。こうした振るまいや発言は、「ニンゲンフシン」になった母親への理解を示していると言えるでしょう。しかし一方で、その母親や、家族から離（はな）れてしまった父親に対する［ c ］も表しているのかもしれません。

そんなえび男くんに「わたし」は、以前と変わらない言動を見つつも、［ d ］も感じます。えび男くんは、「わたし」に自ら声をかけて以前のやりとりを再開させますが、こうした言動には、これまで自身をとりまいていた関係から［ e ］が伺えるでしょう。「むかしのひかりいまいずこ」と小さな声で歌うえび男くんは、家族三人で過ごしたあたたかな日々が過去のものになってしまったことを、いま涙とともに受け入れようとしており、それゆえ、「星はね、あったかいよ、きっと」と言うのです。「わたし」は、そんなえび男くんの手を握りながら、ともに歩を進めます。ここには、［ f ］も感じとることができるでしょう。

（ア）父親を家族につなぎ止める方法
（イ）子どもから大人へと変化する兆し
（ウ）えび男くんなりの反発やあきらめ
（エ）一歩外へ踏み出そうとしている様子
（オ）えび男くん特有の感謝と期待の表し方
（カ）「わたし」に対して違和感を抱く様子
（キ）父親とのつながりを確かめたい気持ち
（ク）母親がかろうじて正気を保つための手段
（ケ）えび男くんに寄り添う「わたし」の思い
（コ）自分と父親の好物が同じだと証明する方法

Ⅱ

次の文章は、加藤秀一『はじめてのジェンダー論』の一部です。文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

ジェンダーをめぐる暴力や格差はたまたま生じたものではないし、また生物学的な本能のせいにして片づけられるものでもありません。それは社会全体の構造に組み込まれた差別のメカニズム、とりわけ賃労働をめぐる差別と分かちがたく結びついています。たとえば、夫から繰り返しDVを受けていたとしても、その夫に経済的に依存している妻が逃げることは困難です。子どもを抱えていればなおさらのこと。つまりDVとは、個人間における腕力の強弱だけではなく、ジェンダーにもとづく経済格差から生じる問題でもあるのです。本章および次章では、このような男女間格差をもたらす社会的要因を探っていきたいと思います。

ただし本題に入る前に、本章では、近年のネット上などでよく見かける〈現在の日本社会にはもはや女性差別など存在しない〉という主張――なかには、いまや差別されているのはむしろ男性の方だ！と息巻く人さえいます――についてまず検討しておきましょう。もしもそのような主張が真実を言い当てているのであれば、本章を支える問題意識そのものが無効だということになりかねないからです。もちろん、女性に対する差別（セクシズム）が実際になくなったのであればそれは喜ぶべきことであり、そのために本書のような本が不要になるなら、筆者としては本望です。けれども、実はまだまだ性差別があるのにそれをなくなったことにしているのなら、見過ごすわけにはいきません。本当のところはどうなのでしょうか。

女性優遇は男性差別？

男性差別云々を申し立てる人たちの多くが、通勤電車の女性専用車両や映画館の女性限定割引（レディースデイ）といった「女性優遇」策をその証拠として持ち出しています。確かにこれらは、それだけを切り取ってみれば、女性を男性よりも優遇していると言えるでしょう。けれども問題は、①そのような切り取り方自体が妥当かどうかです。人のふるまいや社会的制度の意味を理解するためには、それらがなぜ、何のために行なわれ、どのような働きをしているのかといった社会的文脈の中に位置づけてみなければなり

ません。具体的には、そもそも女性専用車両が導入され定着するに至った経緯や、レディースデイというサービスが企業と顧客にもたらしている効果を考慮する必要があるのです。

女性専用車両

もともと女性専用車両は、列車内における痴漢という性暴力犯罪への対処策として導入されたものです。つまりその本来の目的は痴漢の被害者（になりやすい人たち）を加害者（になりやすい人たち）から遠ざけることであって、女性を男性から隔離することではありません。これは決定的に重要なポイントですが、なぜかしばしば見落とされています。

それではなぜ女性／男性という性別がクローズアップされたのか、そしてなぜ男性専用ではなく女性専用車両なのかと言えば――本書をここまでお読みになってきたみなさんにはすでにおわかりだと思いますが――加害者の圧倒的多数が男性であり被害者の圧倒的多数が女性であるという非対称性が性暴力の現実であるからです。興味深いことに、女性専用車両に文句をつけている人たちの中に、公平を期するための男性専用車両を要求する人はほとんどいないようなのですが、いったいなぜなのでしょうか。もしも仮に、痴漢の被害者の多くが男性だったとしたら、男たちはとっくに抗議の声を上げ、男性専用車両ができていたことでしょう。

念のために確認しておきますが、女性専用車両が痴漢対策として理想的な方法だというわけではありません。本来は痴漢という犯罪自体を撲滅することが望ましいに決まっているのですが、それが実現するのはいつのことになるか――そもそも可能かどうかさえ――わからないので、②――さしあたりの対症療法がとられたということです。この点について、加害者ではなく被害者の方が行動の変化を求められるのはおかしいという批判もあるでしょう。確かに、本来ならば痴漢をしそうな人たちの方を集めて隔離するのが筋かもしれません。しかしそれはどう考えても技術的に非常に難しく、また人権保障の観点からもほとんど不可能であることは明らかです。女性専用車両とは、こうした諸条件の下でやむなく採用されている不完全な痴漢対策にすぎないのです。

このように、女性専用車両という現象をきちんと社会的文脈の中に位置づけてみるならば、それは女性を「優遇」しているわけで

も何でもないということが見えてくるはずです。それは女性たちに何かプラスをもたらしているわけではなく、せいぜい痴漢被害というマイナスを少しでも埋め合わせてゼロに戻そうとする補償的措置にすぎないのですから。それどころか、むしろ「優遇」されているのは、そもそも痴漢被害に遭う危険性が低い男性たちの方ではないでしょうか（もちろん男性も痴漢被害に遭うことがありますから、これはあくまでも全体的な傾向の話です）。いわばこれまでの通勤電車はすべてが男性優先車両だったのに、ほとんどの男性たちはそのことに気づいていなかっただけではないでしょうか。

こうした観点からさらに、これまでの列車は「健常者優先車両」「子どもを連れていない人優先車両」「高身長者優先車両」等々でもあったのではないかと考察を広げていくこともできるでしょう。自分が③マジョリティ（多数派、主流派）に属する人は、こうした視点をもつことが難しく、優遇されている自分の状況を当たりまえのように受け止めがちです。それにもかかわらず、他人が優遇されることにはやたらと敏感で、自分が損をしているのではないかと不安で仕方がなくなってしまう人がいるようです。マジョリティが陥りやすいこのような傲慢性には、いくら注意してもしすぎることはありません。自戒の念を込めて書きとめておきたいと思います。

レディースデイ

女性専用車両に比べて、映画館のレディースデイのような女性限定割引サービスの［A］は微妙な問題を含んでいます。映画が好きだけどお金がないのであまり映画館に行けないという若い男性が、自分だって割引価格で新作映画が観たいと思う気持ちは、映画好きの人なら共感できるでしょう。けれども、そうした実感がどれほど切実なものであっても、客観的に「女性優遇」であり「男性差別」であると言えるかどうかは別の問題です。はたしてレディースデイをそのように批判することはできるでしょうか。

女性限定割引サービスが導入された経緯は業種や地域などによってさまざまですが、女性客を呼び込むことで集客数や売上高を増やすという目的は共通です。その効果について言えば、映画館の場合、レディースデイ（水曜日が多いようです）に女性客が増えた

ことは事実らしいのですが、そのぶん他の曜日の女性客が減少した［B］もあり、全体として収益の増加につながっているかどうかは一概に言えません。ただ、女性の方が映画館に行く回数が多いため、女性に人気のある映画の方がヒットしやすいうえに、女性は独りではなく複数で映画館に行く傾向があることや、自分が観た映画について友人に話す機会が多いことなどから、1人の女性客を惹きつけることが2人以上の集客につながりやすいと期待することにはそれなりの根拠はありそうです（NTTコム「第3回『映画館での映画鑑賞』に関する調査」2014年）。映画館業界の人々はそのような期待に賭けているのでしょう。

しかしながら、④儲かれば何でもやっていいというわけではありません。私たちの問題は、レディースデイの市場経済的合理性ではなく、それが「男性差別」であるか否か、言い換えれば、そのようなサービスを社会として倫理的に許容すべきか否かということでした。企業が顧客の属性によってサービスの内容を変えることは、［C］という基準にてらして適切であることもあれば、不適切な差別に該当する場合もあります。ここでも重要なのは、そのサービスの意味を社会的文脈の中に位置づけて理解することです。

たとえば、身体に障害のある人に対して映画館が入退場時に手助けしたり、特別な座席を設置したりすることは、障害者の正当な権利を実現する方策として正当化されます。そうしたことに対してさえ「健常者差別だ」と謎の文句を言うような人は、もはや無視するしかありません。⑤すでに女性専用車両について述べたように、差別を受けている人々に対する局所的な優遇措置は差別行為ではなく、まったく反対に、差別を是正する行為だからです。もしも映画館のように［D］の高い施設が健常者だけを念頭に置いて造られているとしたら、そのことの方が不正なのです。

他方、映画館が顧客の肌の色や出身地によって料金を変えたり、入場を制限したりすることは明らかな差別です。日本の映画館でそのような事例があったかどうかは知らないのですが、公衆浴場や飲食店では、外国人の――しかも「ロシア人」とか「中国人」といったように特定の国籍をもつ人たちの――入場を断る店がしばしば現れ、そのたびに世論の批判を浴びてきました。マナーの悪い外国人対策だといった理由が挙げられることもありますが、⑥それならナニジンであれ――もちろんニホンジンも含めて――マナーの悪い人を閉め出せばよいのであって、顧客を国籍や民族によって差別化してよい理由にはなりません。もしもこの議論がピンとこ

ないという人がいたら、たとえば以下のような事態を想像してみるとよいでしょう。あなたが所属している〇〇大学の学生がスターバックス・カフェでトラブルを起こしたために、以後その店ではあなたも含めた「〇〇大学の学生」すべての入店が禁じられ、やがてそうした対応は特定の店舗だけでなく全国の店舗に広がり、さらに他のカフェや居酒屋もそうした動きに追従していった……。このときあなたは、ご自分も含めた〇〇大学生が排除されるのは仕方がない、と思えるでしょうか。イエスと答える方には、もう何も申しません。なお付け加えるなら、人種や国籍にもとづく差別は、大学名による差別以上に深刻であると言うべきです。大学なら他の大学へ入り直すこともできますが、国籍や肌の色は基本的に変えられないからです。

さて、ここまでの考察をふまえて、映画館の女性限定割引を男性差別と呼ぶべきかどうかについて考えてみましょう。問題は料金という金銭に関わることなので、ここではお金の問題という側面に話を限ることにします。

E

このように経済的に劣位にある集団が割引を受けることは不当でしょうか。もしそうだとするならば、生活苦にあえいでいる人が生活補助を受けたり貧乏な学生が奨学金をもらうことはお金持ちの人々に対する差別だというような、奇妙なハナシになってしまいます。

もっとも、映画館はべつに収入の低い女性に対する福祉事業として割引サービスを行なっているわけではありません。それに、収入の低い人に対する割引というなら、映画好きの貧乏学生は男性であっても割引を受けるに値すると言うべきでしょう。さらに、他人の性別を判定するという作業そのものに伴う問題もあります。外見的に女性に見えない人はどのように扱われるのでしょうか。性別が記載された身分証明書が必要なのでしょうか。戸籍上は男性である*トランス女性が十分には女性としてパスできていない場合、割引を受けられるのでしょうか。

レディースデイというサービスにはこうした問題がはらまれている以上、現時点で「男性差別」であるとまでは言えなくとも、今後は消えていくべきものであると筆者は考えています。雇用や労働をめぐる男女平等が達成されれば、このようなサービスはおのずと消滅していくでしょうし、もし消滅しなければ、そのときこそは断固として「男性差別」を告発すべきでしょう。そういうわけですから、⑦女性割引が気に入らない人は、男女平等の社会を実現するために頑張って活動してください。なお、以上の考察はあくまでも経済格差という視点からのものであり、その他の要素、たとえば男性が多い場所に女性が同席する際の恐怖感といった問題は無視しています。⑧読者のみなさんは、筆者が触れなかった他の観点からの考察も試みてください。

【注】

＊トランス女性……生まれた時に割り当てられた身体の性別と、自身で認識している性が一致していない女性。

【問1】 ――①「そのような切り取り方自体が妥当かどうか」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、（ア）～（エ）の記号で答えなさい。

（ア） 一部の女性に有利な措置を採ることで、多くの女性が不利益を被る結果になるのではないか、ということ。

（イ） 女性が得る利益のみに着目して、現状を把握しようとすることは、果たして適切であるのか、ということ。

（ウ） 男性と女性とが共に協力できる社会を目指して、今後のあり方を早急に検討していくべきだ、ということ。

（エ） 女性に対する差別の是正を目指すために、まずは生活水準の向上に着目しなければならない、ということ。

【問2】 ――②「さしあたりの対症療法」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、（ア）～（エ）の記号で答えなさい。

（ア） 適切な環境があれば実現可能ではあるが、技術的には難しい対処法のこと。

（イ） できる限り早く問題解決を図るために、何よりも先に取るべき行動のこと。

（ウ） 完全な形での解決を諦めてしまった場合に、やむを得ず選んだ行動のこと。

（エ） 根本的な解決が成されるまで、取り急ぎ目の前の問題にのみ対処すること。

【問3】 ――③「マジョリティ（多数派、主流派）に属する人」とありますが、これに関する次の説明文を読み、［ a ］～［ f ］に当てはまる語をそれぞれ選び、（ア）～（ク）の記号で答えなさい。ただし、**同じ記号を2度以上用いてはいけません**。

本文で例として示された通勤電車のように、社会で［ a ］される物の多くは、マジョリティに合わせて作られています。例えば、つり革は背の低い人にとっては高すぎるものでしょう。また、個人で使用するものも同様です。はさみも右利きの人に合わせて作られており、左利きの人にとっては使いづらいものです。とはいえ、マジョリティを使用者として［ b ］した上で物を作ること自体は、より多くの人が［ c ］に利用できるようにするためのものと言えるでしょう。

しかし、マジョリティに属していると、自分が使っているものが、他の人にとっても［ c ］なものだと思い込んでしまいがちです。それどころか、その状態を［ d ］だと捉え、自分たちが社会において優先的に扱われていることにすら気づけないこともあるでしょう。このことに、筆者は［ e ］を鳴らしています。

様々な面において優先されていると言えるマジョリティの人々とは、そうでない人々から見れば［ f ］を持った存在と言えるかも知れません。そのことに無自覚なまま、他者が優遇されることを批判するのは、まさに傲慢そのものだと筆者は指摘しているのです。

（ア） 想定　（イ） 独占　（ウ） 共有　（エ） 便利
（オ） 決断　（カ） 当然　（キ） 特権　（ク） 警鐘

【問4】 A ～ D に当てはまる語の組み合わせとして適当なものを次の中から選び、（ア）～（エ）の記号で答えなさい。

（ア） A―可能性　B―正当性　C―公共性　D―平等性
（イ） A―平等性　B―公共性　C―正当性　D―可能性
（ウ） A―正当性　B―可能性　C―平等性　D―公共性
（エ） A―公共性　B―平等性　C―可能性　D―正当性

【問5】 ――④「儲かれば何でもやっていいというわけではありません」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、（ア）～（エ）の記号で答えなさい。

（ア） 様々な社会的文脈において、経済的な効果を第一に考えてしまっている、ということ。
（イ） 利益の追求を優先するあまりに、社会的な正しさを軽（かろ）んじてはならない、ということ。
（ウ） 売上の増加につながるのであれば、どんな手段でも正当化されてしまう、ということ。
（エ） 顧客の属性を念頭に置いたうえで、サービス内容を熟慮（じゅくりょ）していくべきだ、ということ。

【問6】 ――⑤「すでに女性専用車両について述べたように、差別を受けている人々に対する局所的な優遇措置は差別行為ではなく、まったく反対に、差別を是正する行為だからです」とありますが、それに関する次の説明文を読み、（1）～（4）について適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

女性専用車両は、痴漢の加害者の多くが男性であり、被害者の多くが女性であるという

（1）（ア）対照的な主張
（イ）想像上の対象
（ウ）非対称な現実

を背景に導入されたものです。

すなわち、（2）

（エ）経済的に不利な状況にある女性の存在を考慮した手段である
（オ）痴漢の被害を受けやすい性別である女性に対象を絞っている
（カ）痴漢に遭う可能性がそれほど高くない人にも目を配っている

と言えます。

まさに、女性専用車両とは、（3）

（キ）女性が置かれている状況を改善するための措置
（ク）女性の被害状況を明らかにしていくための措置
（ケ）男女間格差の根本的な是正までも見据えた措置

なのです。

筆者は以上の点をふまえ、女性専用車両は（4）

（コ）男性のえん罪を防ぐことにはならない
（サ）男性を差別することには当たらない
（シ）男性の権利を尊重することにつながる

と主張しています。

【問7】 ――⑥「それならナニジンであれ――もちろんニホンジンも含めて――」とありますが、ここで「ナニジン」「ニホンジン」とカタカナで表記されているのはなぜだと考えられますか。その説明として、次の中から最も適当なものを選び、（ア）～（エ）の記号で答えなさい。

（ア） 肌の色や出身地による明らかな差別を批判することは、世論に呼応した意見であると強調するため。

（イ） 表音文字であるカタカナを用いることにより、日本という枠組みに囚われない思考を実現するため。

（ウ） マナーの悪い人も尊重するべきであり、その出身に関わらず等しく扱う必要があると主張するため。

（エ） マナーが悪いことを、ある特定の国民の問題として認知することは、偏見の表れだと示唆するため。

【問8】 E には、次の（ア）～（エ）の文があてはまります。意味が通るように並べ替え、その順番を解答欄の指示にしたがって（ア）～（エ）の記号で答えなさい。

（ア） しかし、現実はそうではありません。

（イ） しかも、20代だけを見ると可処分所得の格差はほとんどないのに、年齢が上がるにつれてその差は開いていきます。

（ウ） あとで見ていくように、収入や雇用の安定性などにおいて、いまなお女性は劣位に置かれているのです。

（エ） もし仮に、世の中に経済的な男女間格差がなく、男性も女性も同じように仕事をして同じくらいの収入を得ているのなら、性別によって入場料に差をつけるのは――男女どちらが高い場合でも――差別であると断定できます。

【問9】 ――⑦「女性割引が気に入らない人は、男女平等の社会を実現するために頑張って活動してください」とありますが、それに関する次の説明文を読み、（1）～（4）について適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

この部分の表現からは、

（1）（ア）真の平等の実現に向けて、あらゆる差別に反対であると声を上げ続けることが重要なのだ
（イ）男性差別であると主張するのであれば、まずは女性割引撤廃のために行動していくべきだ
（ウ）女性が優遇される状況について、男性差別であると決めつけるのは安易な振る舞いである

という筆者の思いが分かるでしょう。さて、筆者は「レディースデイ」について、

（2）（エ）男性より社会的に劣位にある女性へ向けた割引は適当である
（オ）貧困層の女性に対象を限定した場合に適当なサービスとなる
（カ）女性のみが利益を得ると誤解されるので適当な名称ではない

と主張しています。これは裏を返せば、男女の経済格差が解消された場合、

（3）（キ）「レディースデイ」が男性からの支持を獲得するのは不可能である
（ク）「レディースデイ」が脚光を浴びるのは非常に喜ばしいことである
（ケ）「レディースデイ」が継続するのであれば、それは男性差別となる

ということです。だからこそ筆者は「男女平等の社会を実現するために」活動するよう、「レディースデイ」を批判する人々に訴えているのです。

一方、「レディースデイ」の対象に関する問題として「外見的に女性に見えない人」や「トランス女性」を例に挙げています。「レディースデイ」の対象として、見た目から女性であると判別可能であり、かつ心身ともに女性である人物しか念頭に置かれていないことを批判しているのです。すなわち、

（コ）「女性」の定義が限定的で、そこから外れる存在が軽率に無視されていること

（サ）どんなことにおいても、「女性」と「男性」の対立をあおり立てようとする人々

（シ）企業に対して、割引対象を男性にも拡充せよと強硬手段に頼って主張する団体

（4）の暴力性を指摘しています。

【問10】 ――⑧「読者のみなさんは、筆者が触れなかった他の観点からの考察も試みてください」とありますが、これに関する次の説明文を読んで、（1）～（4）について適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

「『奢り文化』は男性差別か」ということについて考えてみましょう。ここでの「奢り文化」とは、男性が女性の分の支払いを代わりに行うこととします。男性ばかりが支払いを任されるような状況は果たして健全でしょうか。

筆者は「これまでの通勤電車はすべてが男性優先車両だった」と述べており、これは男性が働き、女性は家事を行うという家庭の形が当たり前だった頃を指した表現です。「奢り文化」もまた、

（1）｛（ア）男性の方が高所得である　（イ）お金を稼ぐのが最優先だ　（ウ）役割分担は効果的である｝という前提のもと成立していた文化なのではないでしょうか。より稼げる方がお金を出すということは、自然なことのように思えます。

一方、現代は女性が外で働くことが当たり前の時代です。それでも「奢り文化」が消滅しないのはなぜでしょうか。もしかすると、（2）｛（エ）男性は社会的に劣位にある女性を守るべきだという価値観　（オ）男性が得たお金は男性のために使って当然だという価値観　（カ）女性は家計のために節約しなければならないという価値観｝がいまだに残っていることが原因なのかもしれません。この価値観を内面化し、自分が奢られることに違和感を抱かず甘んじている女性も多いはずです。「奢り文化」とはそれ自体に男女の序列が含まれているものですから、それを当然視することは、期せずして男女格差を肯定することにつながってしまいかねません。

男性の立場からも考えてみましょう。どれだけお金を稼いでいるかということが「男らしさ」と結びついてしまって

いるのであれば、「奢り文化」は、ときに

（3）（キ）男らしくあることから脱却する絶好のチャンス
（ク）男らしくあらねばならないというプレッシャー
（ケ）男らしくあることの意味を失いかねないピンチ

へとつながってしまうのです。女性専用車両・レディースデイは、いずれも困難な状況にある女性の存在に目を向けたものでしたが、一方で「奢り文化」のように、

（4）（コ）女性の社会的地位が少しずつ改善されようとする気配
（サ）男性としての価値が経済力によって測られがちな現実
（シ）男性がその経済力を自慢することができなくなる場面

があることにも、目を向ける必要があるでしょう。

考えてみれば、試験の成績や偏差値だって、否応なく学習者に序列をつけるものである一方で、人としての豊かさに直結するわけではないはずです。すべての人がその人らしく生きられる社会を実現するためにはどうすればよいか、考え続けることが重要です。

【出典】

Ⅰ　川上弘美「星の光は昔の光」『神様』（中公文庫、二〇〇六年）一〇三～一二三頁。

Ⅱ　加藤秀一『はじめてのジェンダー論』（有斐閣、二〇一七年）一六四～一六九頁。

※ただし、問題作成の都合上、一部省略したところがある。